

theme

自然と文化

Aru

Sustainable

Study

Tour

vol.

1

KYOTO

produce by Loftwork Inc.

2024. 11.20 _ 21

<https://aru.org>

次の百年の
社会を見据えた、
新たな価値と
物語を考える。

100年後の世界のために描く、 未来に向けた価値創造物語。

Questions for the Future.

VALUE CREATION STORY

for the Future World in another 100 years.

Aru Societyとは

都市と社会のインターフェースを構築しながら
より良い未来の社会の在り方を共に考える“都市コモンズ”です。

都市とは、私たち人間が、
自らの営みとして、自ら創造し、進化させ続けてきたものです。
そのように捉え直してみると、
都市を構成する社会、経済の在り方そのものを、人間が自らの意思を持って
より良い状態に変容させることも可能であると言えるのではないのでしょうか。

都市をフィールドにしながら
「共に在る、より良い社会を考える」という高い目的に向かい
すべての人々が等しく、互いを理解し合い、
多様な領域を越境し合いながら、それぞれのCREATIVITYを発揮し
新たな豊かさという価値で溢れる社会を創造する。

そして、時には立ち止まって、
すでに足元に在る“見失ってきた大切なもの”を深く見つめ直しながら
創造的に変容していく“未来”という物語を編み直していく。
私たちは、過去と現在を振り返り、繚み直しながらも
未来という可能性を、同時に編み出していくことができるはずです。

100年後の未来に、何を遺したいか？

そのためには、今、どう在るべきか？

Aru Societyとは、

100年後の世界のために描く、未来に向けた価値創造物語でもあるのです。

Urban Commons Project

『Aru Society』

ロフトワークがこれまでの事業形態をさらにパワーアップさせながら、
新たな都市コモンズの構築にトライする
urban commons project 『Aru Society』。

都市とは、多様な人々、多様な社会の要素が複合的、重奏的に合わさり、
構築されたインターフェースだと捉えると、
都市の内側、足もとにこそ、
社会の重要な変革の起点を見出すことが出来ると私たちは考えています。
都市というフィールドにおいて、
あらゆる領域を越境し合いながら変革の起点を見出しながら、
何が社会の豊かさになるのかを考え、再定義することを重視しています。

プロジェクトのアウトプットとして
、100年先に向けた価値創造物語を編み出しながら、
同時に、日本独自のサステナビリティにおけるインパクトの価値や
指標のコモンセンスについて多様なステークホルダーのみなさまと共に考え、
ジャパNSTANDARD・モデルをデザインし、
新たな豊かさの価値として再定義し、社会に提言することを目指しています。

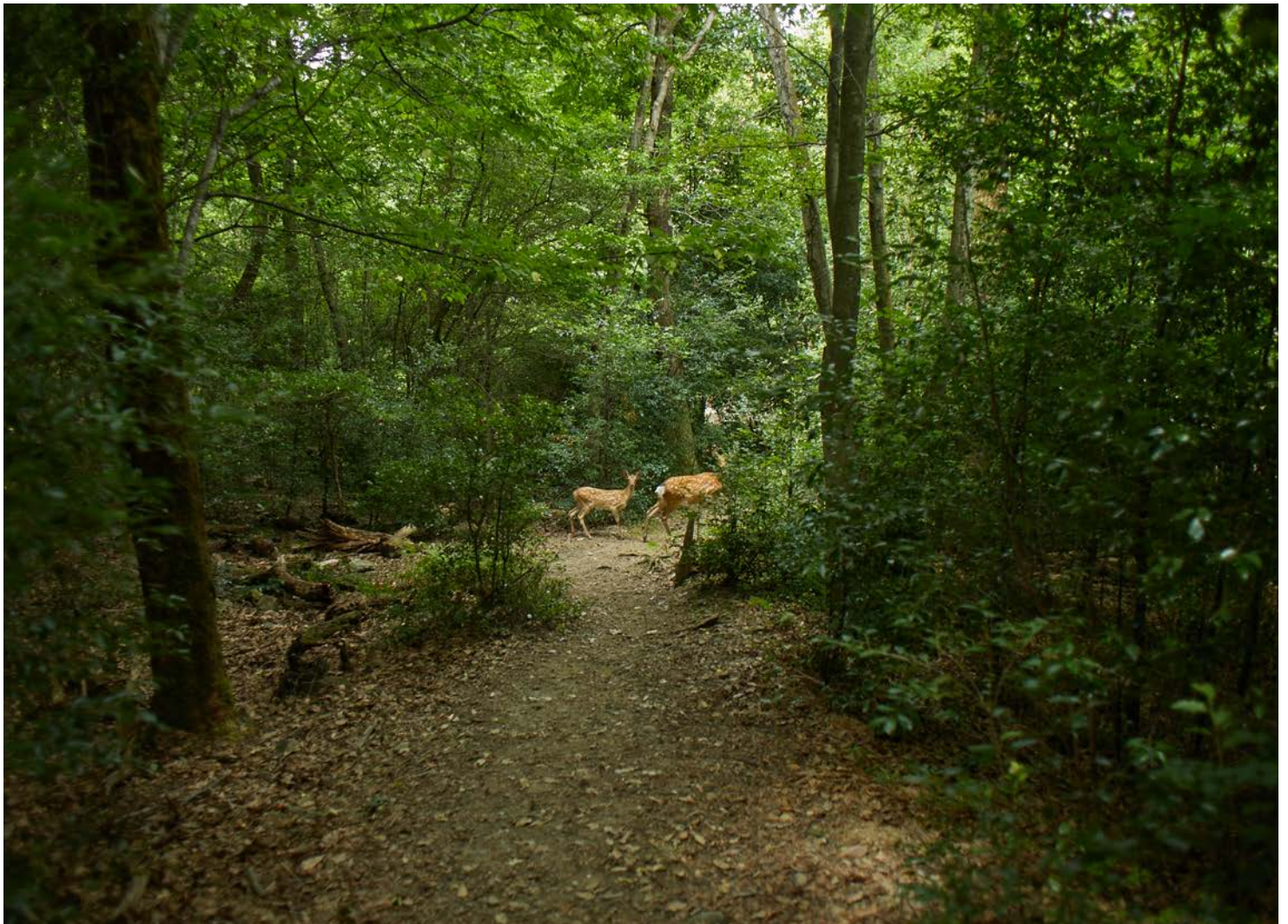
指標とは、本来、他者の善悪を評価するために存在するのではなく、
何が社会にとっての豊かさを示すのか、
何を大切にしたいのか、どのように在りたいのかを自らが考え、
提示することで、共感する人々を世界中から集めるために在るものだと、
本プロジェクトでは考えています。

「Aru Society=共に在る、社会」を目指して、『Aru Society』を発足します。

urban commons project Aru Society

<https://aru.org>







about

Aru Sustainable Study Tour について

「Aru Society=共に在る社会」について、共に学び合い、語り合う、特別な方々が集うツアー。Aru Sustainable Study Tour では、以下の2つのことを大事にし、学び合いながら、共に考える時間を共有し合う場にしたいと考えています。

持続

100 Years of Strategic Design=Japan Standard Model

次の百年を見据えた経営計画を立て、ジャパンスターダートモデルを創出する。

価値

100 Years of Commons Value Story

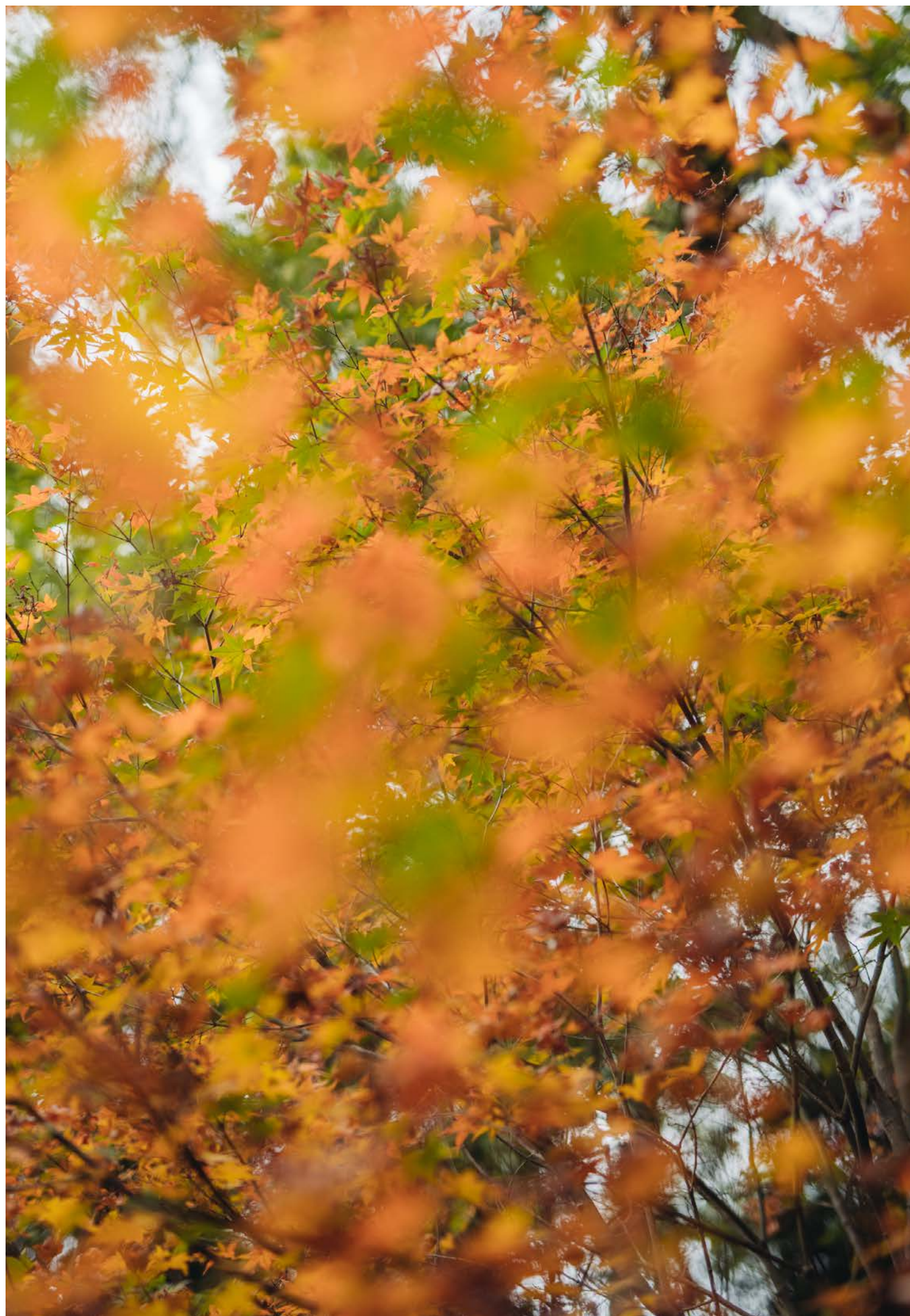
次の百年の社会を見据えた、新たな価値と物語を考える。

ツアーの1回目の場所として選んだのは、京都。どのような時代においても、唯一無二の価値を創出しながら、時代を見据えた変革を遂げながら、独自の「持続」のスピリットとスタイルを築き上げてきた京都は、世界中からその価値を体験したいと多くの人々が訪れる世界を代表する都市ですが、今、その価値の本質にある「文化価値の持続性」が非常に困難な状況に追い込まれ、危機的な状況を迎えています。その要因の一つには、京都の文化の土台となり、また、1200年の長きに渡り、営みを支えてきた、都市を囲む里山や森といった自然が急激に荒廃しているという実態があります。

五山の送り火、祇園祭など、京都を代表するお祭りという地域の文化であり、人々の営みは、自然や風景と共に在り続けるという本質的なスピリットから生まれて来ているものです。お祭りのための材は、木材、薬、竹など、本来、何十年、百年先を見据えて計画をし、森の保全をしながら、自然と人が共に在り続けて来たからこそ、一年に一度、大事な営み、文化として続いて来ましたが、森の荒廃によって、年々、材を揃えることすら難しい状況に追い込まれています。背景には、人と共にあったはずの多くの森や田畑が放棄されていることがあります。京都を始め、日本の国土の7割を占める森林地帯でも同様の問題が起きています。

そのような状況にあっても、悲観するのではなく、「自然、風景、文化こそが価値であり、百年続けることに意義がある」という強い信念を持って、ではどうすれば良いのか？ということに前向きに捉え、挑戦し、実践し続けている企業や人々がいます。

今回、そのような実践者の方々と共に、まずは、現状どのようなことが起きているのか、またその解決策を具体的にどのように導き出しながら、どのようなことに挑戦されているのかを実際の現地に赴き、学び、そして、自然と風景と人が共に在ることの価値を体感し、共有し合う時間を設けたいと思います。さらに、次の百年を見据えた「豊かさの再定義」について共に学び、解決を超えた新たな価値に転換していくことについて共に考え、自由闊達に議論し合う、ラーニングやコンズ会議を実施いたします。百年先も、より良い未来を創るために。



about

2050 年の京都市の持続的都市構想への道筋を描く。

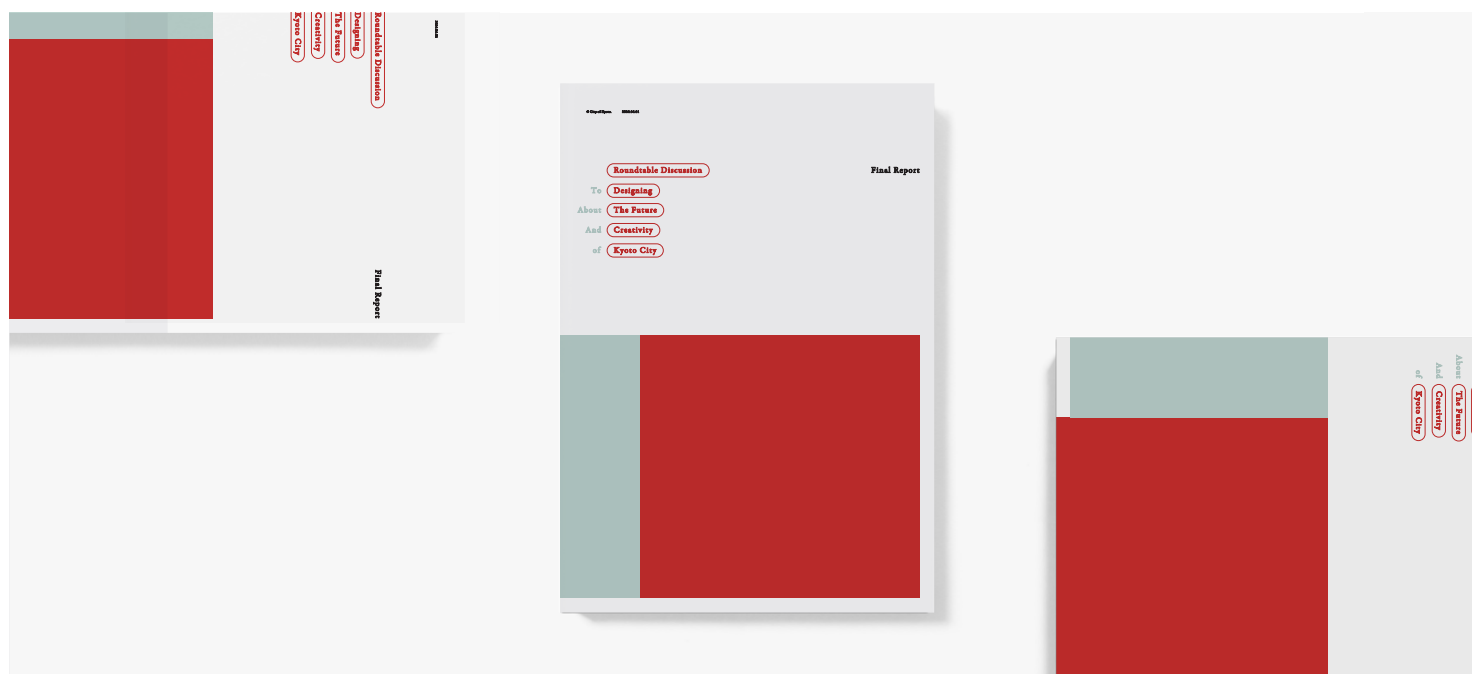
「創造的都市、京都」とは何か？

ロフトワークは、京都市の「カルチャープレナーの創造活動促進事業」*にて採択され実施したプロジェクトの活動報告レポートを公開しました。本レポートは、京都市が目指す「文化と経済の好循環を創出する都市」をテーマに都市構造を読み解き、京都という都市が持続的に発展し続けるための構想を提案しています。

少子化や産業構造の変化による市外への人口流出をうけ、人口減少に直面する自治体は少なくありません。8ヶ月に及んだ本プロジェクトでは、ディスカッションやリサーチを経て、都市が人口の量を増やすことで都市の価値を測ることから脱却し、都市構造を本質的に読みとく重要性を提起しています。

少子化・人口減少問題への対応が市政の最重要課題になっている昨今、京都市は強みである文化力を最大限に活かした政策を推進しています。その中で、京都市は自分たちの文化、価値観への愛着等をエネルギーの起点に、共感者を増やし、文化的遺伝子を残していくことで事業を行う人を「カルチャープレナー（文化起業家）」として注目。彼らが創造する新しい評価軸や社会的インパクトを京都から提唱することで、創造的な人々が集まり、定着する「優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市」への発展を目指し、これからの都市デザインを議論する「カルチャープレナーの創造活動促進事業」を令和5年度から実施しています。

京都市との共同プロジェクトとして、ロフトワークは、2023年7月～2024年3月まで活動。「京都市グランドビジョン」の策定（2025年）を念頭に、より良き京都の未来への道筋を探る視点を導き出すために、有識者、学生、起業家、情報機関、企業、行政等、京都内外の多様な人々とラウンドテーブル（ステークホルダーが一つの円を囲み、立場に関係なく公平に議論すること）を行い、ディスカッションを通じて新たな価値を見出しました。



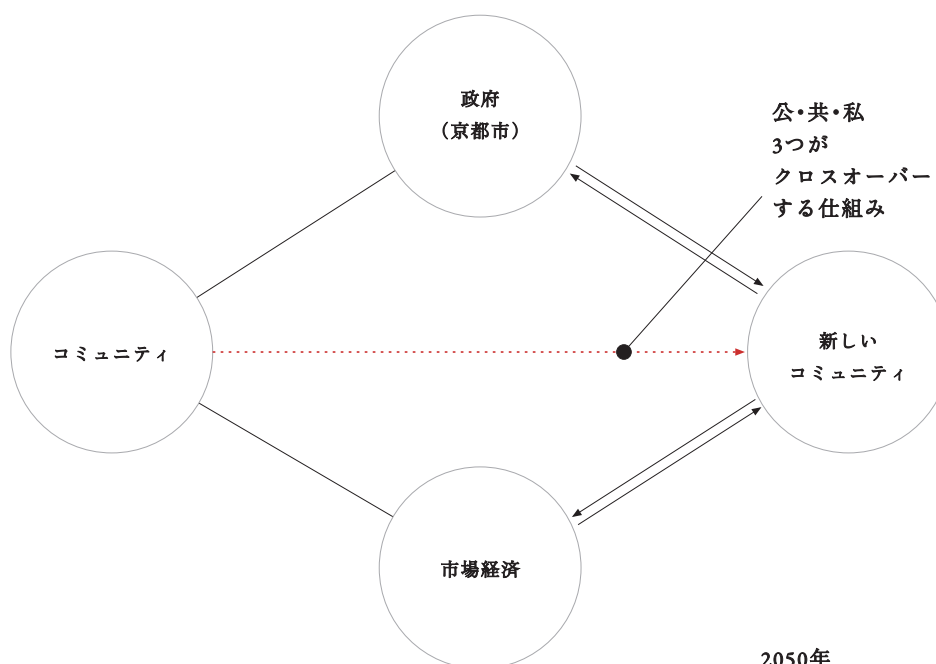
about

Project Vision

本事業では、京都市グランドビジョン策定（2025年策定予定）も念頭に持続可能性の高い概念・プロセスを構築するため文化と経済の好循環を生み出す道筋と指標を設計し実践への道へと数年かけて実現させ成功へと導いていく起点を生み出すことが最大のミッションである。京都の文化資本、社会資本、経済資本をクロスオーバーさせあらゆる課題を解決し、社会的富を生み出す人財、及び、その仕組みを再定義・再構築する必要がある。

CSSV(Creating Shared Sustainable Values)

文化と経済の好循環の創出



現在

町衆文化に代表される、次世代に継承されるべき価値を生み出し続けるコミュニティが構成されていたが、現代では持続可能なモデルになっていない。

→ ×持続可能性、×公平性

2050年

課題解決を行いながら、新たな価値や価値観が生まれ、人々が豊かな経済生活を営み、文化を展開していくための共生社会の基盤が持続可能なモデルとして描かれている状態。

→ ○持続可能性、○公平性

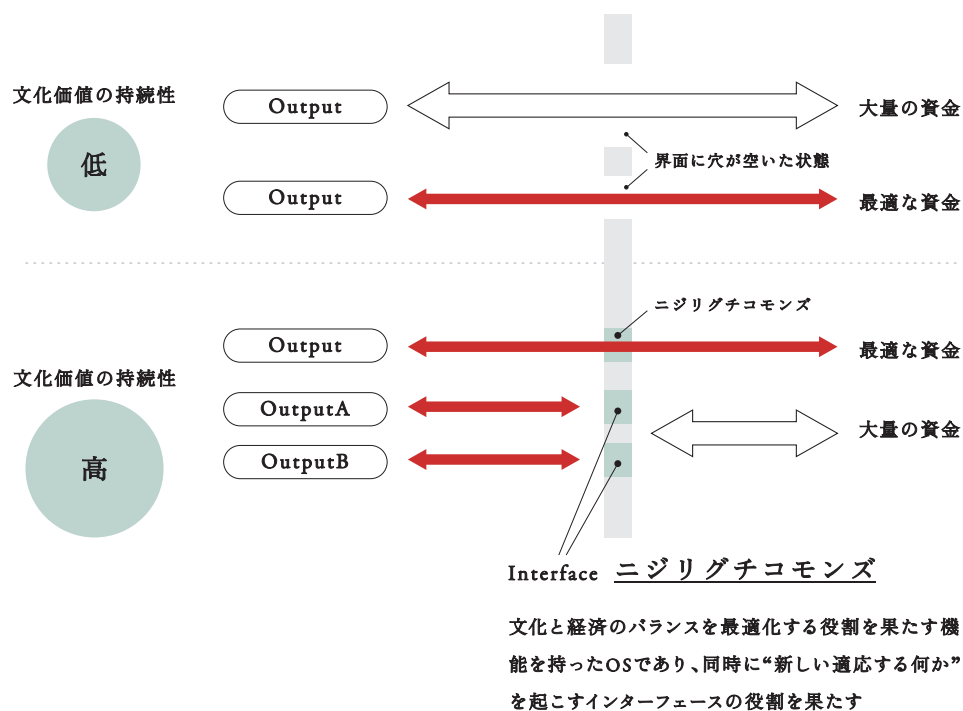
about

「創造的都市、京都」としての仕組みを設計し

KYOTO_MODEL001 “Interface”

ニジリグチコモンズを提唱

企業、京都市、ロフトワークが共にディスカッションを重ね、持続的繁栄を目指す都市構想モデル「創造的都市、京都」の仕組みとしてKYOTO_MODEL001 “Interface”を提案しています。京都の中核にある文化価値を持続するために、躡口（ニジリグチ）的インターフェースをOSとして設計することを仮説としています。躡口とは茶室に入るときに出入口で、千利休が草庵茶室・待庵に設けた小さな入口がはじまりと言われています。本プロジェクトでは、躡口を経済合理性が文化よりも優位に働くことを無効化するシステムとしてとらえ、“ニジリグチコモンズ”として表現し、文化と経済のバランスを最適化する役割を果たす機能を持った仕組みであり、同時に“新しい適応する何か”を起こすインターフェースとして提案しています。



Aru Society

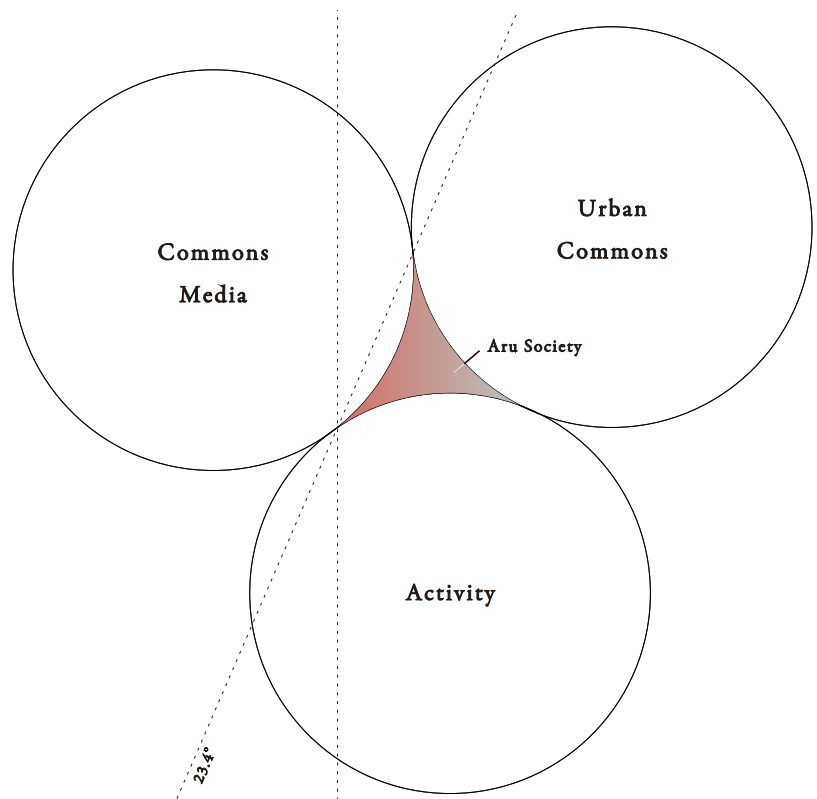
クリエイティブ都市コモンズ・

Urban Commons『Aru Society Kyoto』発足について

昨年度、京都市と弊社の共同プロジェクトとして「持続する都市構想」に取り組ませていただいたことを契機とし、今回はそのスピノフとしてのクリエイティブ都市コモンズの発足やツアーの企画に至りました。

京都の文化価値を持続することを意義として、価値の背景にある森と水といった自然資本を時代に合わせながら進化させ持続することを目指し、京都地域コミュニティの方々と、これまで繰り返し協議を行ってまいりました。

地域、企業、自治体、有識者、クリエイター、起業家、学生、金融機関等を接続しながら、それぞれの領域を越境し合い、特に、企業の無形資産を活かした新たな技術開発等のイノベーションに接続する、起業家やクリエイターのクリエイティビティを自然や文化と結合し、多様な創造性を循環させることで、保全等の現状維持に留めない進化という都市の変革を促していきたいと考え、昨年度提唱させていただいたニジグチコモンズの構想をもとに、クリエイティブ都市コモンズ・Urban Commons『Aru Society Kyoto』を発足いたします。



Urban Commons:都市マーケットデザインとして、京都、大阪、東京の3拠点にて都市コモンズの発足。

Commons Media:100年後の世界のために描く、未来に向けた価値創造物語。

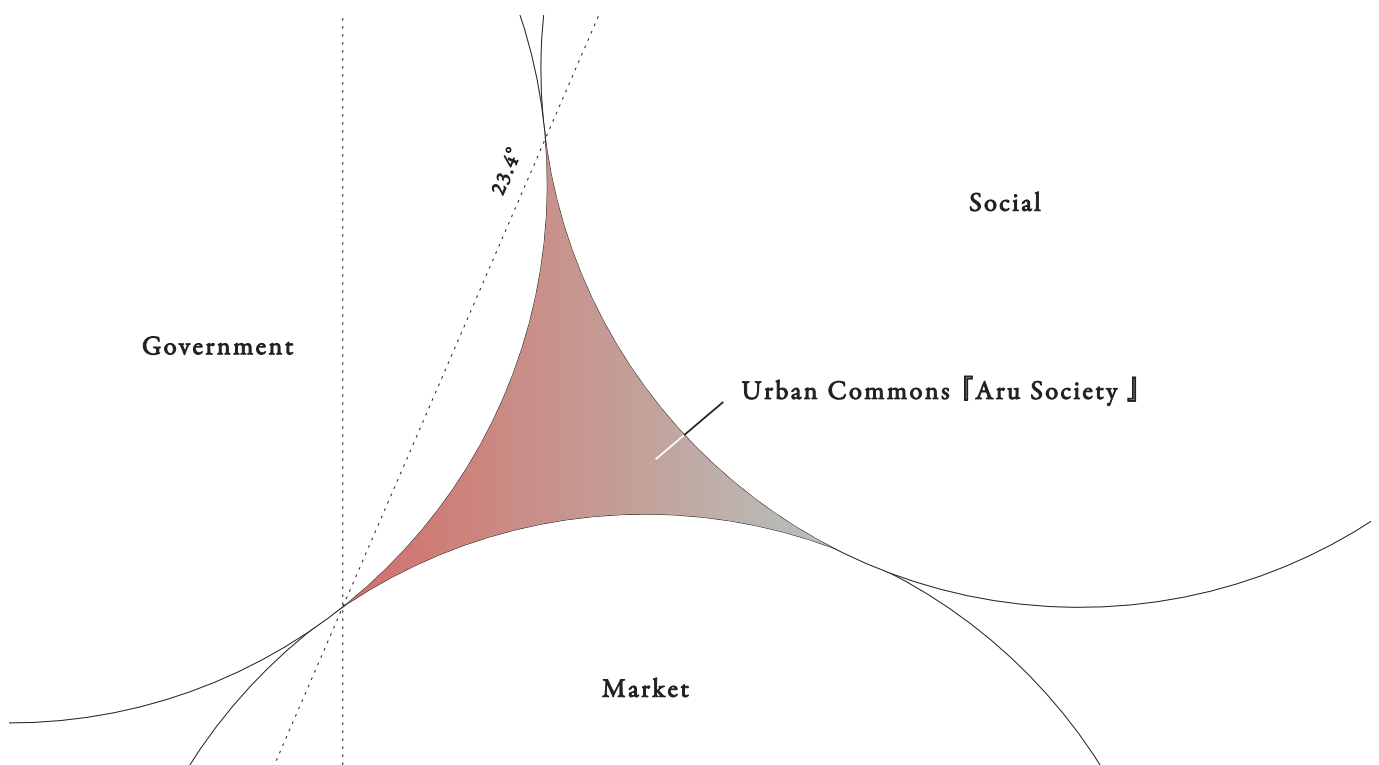
Activity:100年後の世界のために描く未来に向けた活動であり活動体としてのプロジェクト。Aru Sustainable Study Tour等。

Social(地域コミュニティ)、
Government(自治体)、Market(企業・市場)の
インターフェースの役割を果たす
クリエイティブ都市コモンズ・Urban Commons『Aru Society』

Aru Society では、100年先に向けた未来の価値創造物語を生み出すCreative Commonsを形成すること前提に、Urban Commons『Aru Society』を京都、大阪、東京の3ヶ所にて順次発足します。都市、地域の無形資産である自然、文化と企業や研究機関等の保有する無形資産を接続しながら、グリーンインフラ、ランドスケープデザイン、アーバンデザイン、パブリックスペースデザイン等の再定義を行いながら、人と自然、文化と都市における関係性を構築し、様々なアクティビティと新たな価値を生み出していきます。

また、将来的な構想として、クリエイティブと都市を接続するアワード・プラットフォームの設計とファイナンス(投資、ふるさと納税、レベニューボンドetc)を組み合わせることで、文化と経済の好循環を生み出し、新たな都市マーケットデザインの仕組みを構築することにも、ステークホルダーのみなさまと共にトライしていきたいと考えています。

そして、100年先を見据えて、新たなビジョナリーな価値の創造やこれからの“法人”としての企業の在り方を共に考えていく活動として、Aru Sustainable Study Tourを実際に地域、社会のフィールドに足を踏み入れさせていただきながら、行ってまいります。



京都、大阪、東京という

3つの都市を自然と文化でつなぐ『Aru Society』

持続可能な成長を伴う健全な社会をどのように描くことができるのでしょうか？

地域・自治体・企業が一体となり、100年先を見据えた社会の未来を考えるクリエイティブ都市commonsを京都・大阪・東京の3都市に設立します。なぜ都市ごとに分けているかというと、それぞれの都市には文化、歴史、風土など全く異なる背景があるからです。私たちはその地域の文化を最大限に尊重しています。『Aru Society Kyoto』では、文化的価値を維持するために、文化的価値の背後にある自然、特に森林と水に焦点を当てていきたいと考えています。現在、京都の森林は深刻な危機に瀕しており、自然に支えられてきた京都の文化や風景を守るためには、森林をどのように再生し維持していくかを考えていかなければならない状況に置かれています。

そして、今から100年前には琵琶湖と京都、大阪湾を結ぶ淀川水路が、防災と物流の水路として人工的に造成されました。来年2025年には船で行き来できる一本の水運として再び生まれ変わります。淀川は自然と人間の共生によって生み出された風景であり、都市の境界を超えて発展した社会の象徴でもあります。このように、今後は、都市というものの前提を捉え直し、社会、経済の未来について改めて考えることが重要であると私たちは考えています。ロフトワークは2025年3月に大阪天満橋に、都市と世界のハブとなるファブカフェグローバルの13番目の拠点をオープンします。そのようなご縁もあり、京都に次いで、大阪に『Aru Society Osaka』を創出する予定です。

次に、東京についてですが、ロフトワークが24年前に企業としてスタートした都市でもあり、東京の街は、クライアントパートナーの皆様と共にゆっくりと成長させていただいた大切なベースの地でもあります。年々、都市の再開発が加速的に進む一方で、地域、自治体、企業の思いが都市の中で共存できなくなっているのではないだろうか？そこにあったはずの東京の文化という人々の営みによって築かれてきた大切なことは、いつの間にか追いやられて/追いやってしまったのではないかと？未来を見据えながら、もう少しゆっくりと都市、街、人々の営みとしての文化や生活の論理について共に考える時間があっても良いように思います。現在、自治体としての東京都は江戸文化や歴史に根付く価値のある都市として未来に向けた動きが始まろうとしており、一部では、文化やサステナビリティを軸とした都市の再編が始まろうとしているようですが、私たちは京都での先行する動きを踏まえ、江戸文化とは、すなわち、自然と人との共生によって生み出された文化であり、その本質は「森と水」にあると捉えています。

都市と森、自然、文化を再び結びつけていくことは、今後百年先の都市の将来を考え、また共に在る社会を地域、自治体、企業が一体となって考える上でも極めて重要な取り組みと考えており、京都、大阪、東京の3つの都市を横断し、接続する、クリエイティブ都市commonsとして『Aru Society Tokyo』を創出する予定です。

Round Table Discussion 1

文化と Be-ing。文化と社会的価値について考える。」
 景観・風土・文化・歴史という資産を
 どのように新たな価値に転換するか？（70min）

speaker 占部まり様（宇沢国際学館 代表取締役／医師）
 近藤 尚己様（京都大学医学研究科 社会健康医学系専攻国際保健学講座社会疫学 教授）
 若杉浩一様（武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所所長・造形構想学部クリエイティブイノベーション学科教授）
 増永 滋生様（株式会社アドプランツコーポレーション 代表取締役）
 奥村 文絵様（冬夏株式会社 代表取締役）

moderator 小川 敦子（株式会社ロフトワーク アートディレクター）

< 前提として、文化の捉え方について >

文化と経済の好循環の創出

京都という伝統的に受け継がれてきた土地に住む人々、社会、歴史、風土に敬意を払い、土地の持つ潜在力、希少性を守り、引き出し、育てていくことを大切にする。バランスのとれた希望の持てる成果を上げ（成長）その利益を人々に還元する（分配）倫理的な目的を達成する。時間、空間を捉え直し、知恵、共感、着想を循環させ、明確にし、質の高い社会を創造する。

文化の本質とは何か？

「社会的に伝えられる行動様式、技術、信念、制度、さらに一つの社会ないしはコミュニティを特徴づけるような人間の働きと思想によって生み出されたものをすべて含めて、一つの総体としてとらえたもの」知的ならびに芸術的な活動として文化芸術を切り取った表層的に捉えるのではなく、伝統的社会における根源的なものであり、人々の営みによって積み重ねられてきた独自で唯一無二の価値として、ここでは文化を捉え、伝えることを重視する。

< discussion 問題提起 >

- 風景と文化

京都の風景という文化をどのように捉えるか？

- 京都の持続

京都は文化と経済をどのように好循環させてきたのか？

- 文化の価値と指標化

文化と経済をどのように好循環させていくことが、未来において、望ましいのか？

文化の価値はどのように可視化し、計測することができるのか？ そもそも、測ることができるのか？

- 自然と文化

マイナスをゼロにする社会課題解決から、マイナスをプラスに転換する文化創造の時代へ。

これからの価値創出をどのように捉えるか？ 捉え直すのか？

- 地域と企業

企業が文化、自然に関わることの意義をどう捉えるか？

- 次の百年の社会を見据えた、新たな価値と物語を考える



コモンズ京都会議 vol.1

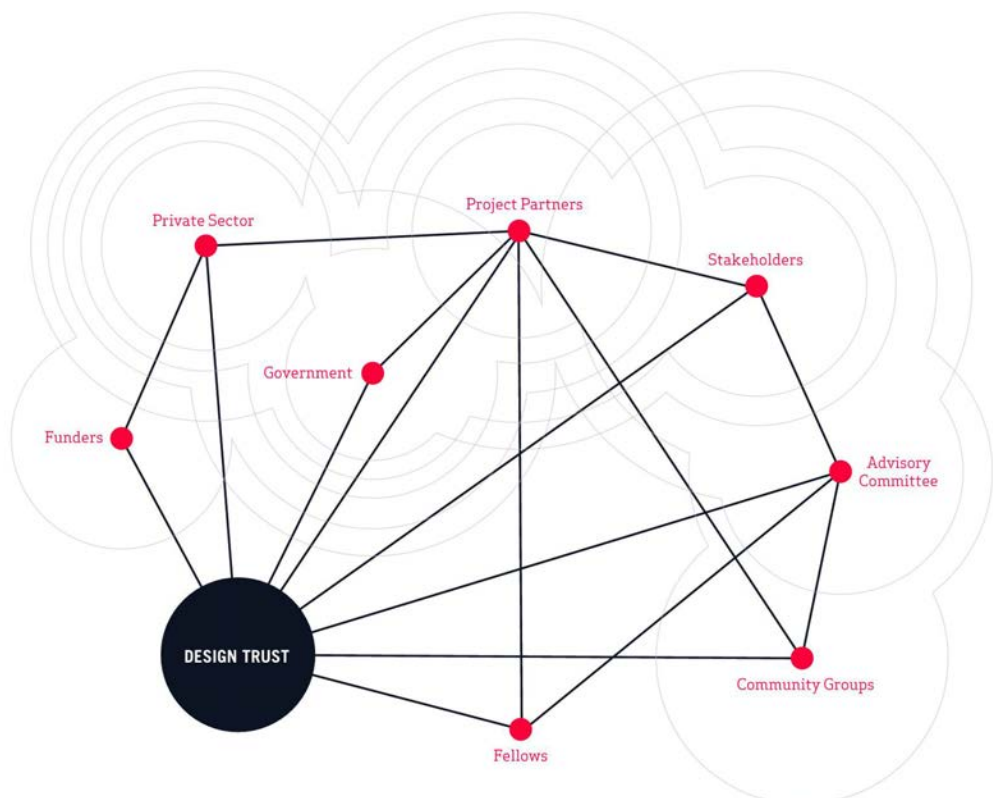
「自然と文化と都市の未来」

京都の文化価値を持続することを意義として、価値の背景にある森と水といった自然資本を時代に合わせながら進化させ、持続することをどの様の実現していくのか。多様な視点を重ね合わせながら、知恵を出し合う。

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授・中島直人さんへのインタビュー『公共空間から人と都市の関係を再構築するパブリックスペース・ムーブメントとは何か?』より抜粋。

都市における公民連携の望ましい在り方について。ニューヨーク市の事例をもとに。

“公民連携とは、単に公の役割を民に開く・任せるのではなく、
都市の中から幅広く知恵を集めることである”



- ニューヨーク市の公共空間政策に深く関わってきたNPOデザイントラスト・フォー・パブリックスペース (DTPS)のように民と公の間をつなぐ存在があって、多元的にNPOが関われるシステムがあります。公民連携のプロジェクトに、そのような存在があれば、例えば民の側の一つである住民や市民がおいてきぼりになることはない。
- 公と民の間にプラットフォームやメディアが存在していることが大事。DTPSというのは、まさにそういったことを結びつけることをミッションとした組織で、具体的に何をやっているかという、ハイレインの例があり、2人の住民が敗廃線となった高架橋の可能性に気づいて、その公園化を思いついたわけですが、彼らは専門家でもなく政府の人間との繋がりもないので、普通は思いついても、自分がその公園を生み出していけるのではないかと考えないですよね。DTPSは、そういうアイデアを持った人たちを見つけて支援します。



出典: <https://www.thehighline.org/>

- 具体的にはどういう人に話を持って行ったらいいとか、運動をどういうふうに広げていけばいいのとか、そういうことをサポートする組織なんですね。もちろん、アイデアを募っても全部は支援できないから選ぶことになるのですが、選んだものを一生懸命支援する。基本的には彼らが持っている人材とかノウハウとかメソッドを投入して、「繋げる役割」を果たしている。
- では、だれがそのような組織にお金を出しているのかというと、政府、ニューヨーク市ではなく、基本は寄付で成り立っているんですね。マーケット側の方がそういう活動があることが健全だと思っているから。その活動が自分たちに批判的な側面もある意味ではあるかもしれないけれども、そこに最後は、寄付というカタチでお金を還元しているんです。そういう回し方をしている。そういうことで繋ぐ役割にもしっかりとお金がまわっていく。
- 企業は直接やろうと思っても、会社はすでに株主のものであって、投資して回収する期間がなかなか長くは取れない。そういう意味では、別のセクターにして、寄付とかそういう形にするのがいいんですね。生活者から見ると、10年20年と住み続けていくことが前提になっているので、その時間軸は違いますよね。価値観が違って、それをどういうふうに結びつけるかということがあって。行政も本当は結びつける役割なんだけど、なかなか行政は難しいですね。
- ニューヨークでは、寄付するのが企業だったり、個人だったりします。投資という意味ではリターンがそもそもあるようなものではないのですが、ただ、最近はESGから始まったようなケースではリターンが得られるものもあるかもしれない。もちろん税金というシステムで分配するということもあり、両方でしょね。再分配のシステムでもあるので、日本では税金とか自治体も制度をつくっていますが、お金というよりも、そこに専門家がいて具体的にパブリックスペースを生み出していくことのシェアをしている、そういうところからもパブリックスペースが支えられているということが大事なんじゃないですかね。日本では、なかなかそこまではないなあと。

まちづくりの“知”は、生活者の視点を集約してつくること。

- まちづくりのリテラシーには、もちろん専門的な話もあるけれども、一方で、生活者自身が無意識に実践しているようなことが実は大事だったりすることもあるって、決して一方的に学術的な“知”としてあるわけではない。交換しあったり、眠っているものを掘り起こしたりする。もともと一人ひとりの中にある、創造性のようなものが発揮できない世の中になっているところをうまく型を外してあげると、いろんなまちで新たな動きが始まるかも知れない。
- ニューヨーク市がつくっている「Good Urban Design」という良いアーバンデザインについてのガイドラインですが、ニューヨークの市民たちがこういうことを学んで、自分たちの意見を持てるようにとリテラシー向上の狙いが「主張するための共通の価値観と共通言語を提供する」と書いてあります。
- デモクラタイジング、つまり民主化といって評価されている。このレポートはつくり方もデモクラティックで、まず動画を公開して、それに対していろんな人の意見を二年間ぐらいかけて集めて、それを編集して最終版をつくっていったらいい。まさに、いろんな人の知恵を集めて生活者たちの持っている。「こういうのが良いよね」という意見を基につくっていったらいいところも非常に面白いのです。

< 仮説の提示 >

クリエイティブ都市コモンズ・Urban Commons『Aru Society Kyoto』は、森から京都を観る視点を軸にスタートする。

- 『Aru Society Kyoto』では、文化的価値を維持するために、文化的価値の背後にある自然、特に森林と水に焦点を当てていきたい。現在、京都の森林は深刻な危機に瀕しており、自然に支えられてきた京都の文化や風景を守るためには、森林をどのように再生し維持していくかを考えていかなければならない状況に置かれている。
- 京都の文化価値の維持は京都の都市の軸にずっとあるものだという分析を都市戦略プロジェクトにて行ったが、さらに地域側へのヒアリングや分析を重ねていくことで、文化価値の根底には「森と水」という自然との深い関係性があることが見えてきた。
- 京都の文化の土壌にある、人と自然との関係性について、京都で培われてきたものを丁寧に情報を集め、集合知を構築することは、自然、文化、都市に対する共通の言葉となり、お互いのリテラシーを高め合いながら、都市の未来を考えていくことにも繋がっていくのではないかと。京都から、日本全体、あるいは、世界の都市の自然、都市と文化の在り方を問い直すことが可能となるのではないかと。

森と人、自然と都市、文化と都市の新たな関係性をデザインする。

- 例えば、市の中心地から車で2時間程度かかるところに湿原地帯といった素晴らしい美しい森が多々あるが、人手も技能も不足してくる等、地元の方々だけで手入れをするのもなかなか難しくなっている。
- 一方で、保全をしてもらいたいからといって、企業にダイレクトに繋ぐと、場合によっては継続して手入れをしてもらえず、雑木林と化してしまう、あるいは、制約を設けなければ環境破壊につながる再開発が始まってしまうという恐れもある。
- 企業側もESGの観点も含めて、自然や社会との共生を今は現業にダイレクトに接続しなくても何かやらないとしないよねという機運や新たな未来のビジネスモデルを構築していきたいという考えは強くなってきているので、地域・自治体と企業側の需要と供給は一致しているのではないかと。
- 森という風景を一つの空間、長い歴史の中で培われてきた大切な文化であり無形資産として捉え直す。植生を維持し続けながら、企業側は持続するためのリターンを得ることは基本的に難しくなるため、森の入口になるところは、人と自然の新たな関係の構築につながるようなパブリックスペースやラボとして、環境を壊すことなく地域側とも共生する形で適度に開いていき、国内外の建築家やデザイナーなどクリエイティブなアイデアを募集をして、企業側の無形資産とも接続し、新たなビジネス創出へ繋がれることで、持続的な取り組みになるような仕組みにできないか？
- 瞬発的なパフォーマンスとしてのインパクトではなく、進化しながらも持続をしていく。100年という長期的なスパンを視野におき、継続的な営みにすることでようやく、森と人、自然と都市、文化と都市の新たな関係性が初めて出来上がってくるという前提を軸としたい。

day1: 2024年11月20日(水)

Tour Process 1

Suntory 山崎蒸溜所と天然水の森

「なぜ、この場所なのか？」ウイスキーづくりの理想郷、山崎の地を訪ねて。

今回のAru Sustainable Study Tour voi.1 KYOTO「自然と文化」ツアー1日目は、まずイントロダクションとして、サントリーが地域の方々のための森として大切な保全活動をされているため、通常は一般非公開となっているサントリーの天然水の森へ訪れます。一つの企業がなぜ、地域、自然、森と関係性をここまで築き上げてきたのか？サントリーの創業の原点に触れていただき、サステナビリティとは何かを改めて考えるヒントを得たいと思います。

サントリーの創業の原点は、まさに、その地の森と水と共に生きることにあります。天王山と三川合流地点が合わさる豊かな水源や風土、風景を最大に活かしたウイスキー作りは、100年という長い時間をかけて熟成され、進化し、まさに産業が文化となった非常に素晴らしい営みです。山の麓には地域の氏神の神社がありますが、荒廃した神社を再建し、森と一体となった蒸溜所を作りあげていったそのプロセスや想いからこそ、創業者の理念や法人としての生き方が表れていると言っても過言ではありません。

案内人：サントリーパブリシティサービス株式会社 PRコミュニケーション事業部
企業PR部 サステナビリティ連携 主任 田中省悟様

【time line】

- 10:00 JR山崎駅集合、ツアー開始、タクシーにて移動
- 10:10 サントリー山崎蒸溜所へ到着、サントリー天然水の森・天王山を登る
- 11:30 天王山から下山、サントリーウイスキー館にて創業の原点に触れる
- 12:00 サントリー山崎蒸溜所を出発、タクシーにて移動

day1: 2024年11月20日(水)

Tour Process 2

TEA INSPIRATIONS in 北嵯峨野竹林

かつての原風景が残された京都・北嵯峨野内の保全地区にある竹林へと移動し、お茶をきっかけにインスピレーションを開く“時空”として、TEA INSPIRATIONSをお楽しみいただきたいと思います。再生された美しい竹林の空間をぜひ美味しいお茶と共に味わっていただけますと幸いです。

さらに会の後半では「文化とBe-ing。文化と社会的価値について考える。景観・風土・文化・歴史という資産をどのように新たな価値に転換するか?」をテーマに、有識者の方々や京都の自然や文化を軸に変革に挑み続ける実践者の方々と共に参加者の皆さまと共にラウンド型のディスカッションを行います。

【time line】	
12:00	タクシーにて移動
13:00	京都府京都市北嵯峨野竹林へ到着
13:00	「自然、風景という豊かさを共有し合う。北嵯峨の自然風景の継承と創造について」 案内人 増永 滋生様(株式会社アドプランツコーポレーション 代表取締役)
13:20	むしやしない(土鍋炊きおにぎりと漬物)
13:30	天道花 杉 謙太郎様(花人)
14:00	煎茶 奥村 文絵様(冬夏株式会社 代表取締役)、中川 香織様(冬夏)
14:20	北嵯峨野内竹林保全地区(京都市)でのラウンドテーブルディスカッション * 焚き火とジャパニーズウィスキー
15:30	焚き火 火消し、day1終了 各位タクシーにて、ホテル、JR嵯峨嵐山駅、京都駅へ移動
18:00	懇親会(祇園 廣東料理 翠雲苑)

Round Table Discussion 1

文化と Be-ing。文化と社会的価値について考える。」

景観・風土・文化・歴史という資産を

どのように新たな価値に転換するか？

speaker 占部まり様（宇沢国際学館 代表取締役／医師）
 近藤 尚己様（京都大学医学研究科 社会健康医学系専攻国際保健学講座社会疫学 教授）
 若杉浩一様（武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所所長・造形構想学部クリエイティブイノベーション学科教授）
 増永 滋生様（株式会社アドプランツコーポレーション 代表取締役）
 奥村 文絵様（冬夏株式会社 代表取締役）

moderator 小川 敦子（株式会社ロフトワーク アートディレクター）

< 前提として、文化の捉え方については、P15を参照 >

< discussion 問題提起 >

- 風景と文化
京都の風景という文化をどのように捉えるか？
- 京都の持続
京都は文化と経済をどのように好循環させてきたのか？
- 文化の価値と指標化
文化と経済をどのように好循環させていくことが、未来において、望ましいのか？
文化の価値はどのように可視化し、計測することができるのか？ そもそも、測ることができるのか？
- 自然と文化
マイナスをゼロにする社会課題解決から、マイナスをプラスに転換する文化創造の時代へ。
これからの価値創出をどのように捉えるか？捉え直すのか？
- 地域と企業
企業が文化、自然に関わることの意義をどう捉えるか？
- 次の百年の社会を見据えた、新たな価値と物語を考える

TEA INSPIRATIONS in 北嵯峨野竹林

水 京都三名水「松尾大社 亀の井霊泉」

米 嵯峨野 自然米キヌヒカリ 土鍋炊き
アドプランツコーポレーション <https://www.addplants.co.jp/>

菜 大原 日野菜 一本漬
田舎沢庵
京つけもの富屋(京都鞍馬口) <https://www.tomiyakyoto.co.jp/>

菓 「Fukiyose」
● 錦降る(道明寺製 白餡)
● きりはり(こなし製 白餡)*小麦粉使用
● 黒緋(麩の焼き製 丹波大納言 粒餡)*小麦粉、卵白使用
● 風跡(こし餡 京都産さつま芋、れんこん)
和菓子店 青洋(京都北山) <https://wagasiseiyou.com/>

茶 tokaseisei_sencha_gokou_2024
京都和束 自然栽培緑茶品種「ごこう」
滋賀朝宮 ほうじ茶
冬夏(京都御所東) <https://tokaseisei.com/>

花 天道花(北嵯峨一本竹、小雪山花木)
杉謙太郎 <https://linktr.ee/kentarosugi>

具 北嵯峨保全竹林および嵯峨野産真竹製
三原啓司 <https://miharakeiji.com/>
アドプランツコーポレーション

day2: 2024年11月21日(木)

Tour Process 3

小倉山の森

ツアー2日目の当日の朝は、小倉山の再生活動について、小倉山を守る会を代表して会長であり常寂光寺ご住職の長尾憲佑さん、副会長で二尊院ご住職の羽生田実隆さん、ランドスケープの観点から自然の再生を専門家として担う(株)アドプランツコーポレーション代表取締役 増永滋生さんに小倉山の森を実際にご案内いただきながら、ご説明をいただきます。地元住民と自治体が一体となった活動を経て、二尊院や常寂光寺などの嵯峨嵐山の御寺のご住職の方々を中心となり、景勝・小倉山を守る会が2013年に結成され、森を再生するプロジェクトが行われています。

嵯峨野嵐山の自然と人が織りなす美しい風景をぜひご堪能いただきながら、長い歴史と共に、いかにしてこの地の風景が生み出されてきたのか、また、今小倉山はどのような状況にあり、どのようなことを目指しているのか、貴重なお話をお伺いします。

【time line】

7:20 JR京都駅新幹線八条口改札前集合、タクシーにて大河内山荘前で降車

* 道が山に近づくに連れて狭くなることやハイシーズンのため車道の混雑が考えられますので、大河内山荘前にて降車し、そこから小倉山の森へ移動をします。

* トランク等大きなお荷物をお持ちの方で、当日の新幹線による移動のご予定がある方は、JR京都駅荷物サービス(<https://kyoto.handsfree-japan.com/>)等をご利用されることをお勧めいたします。

8:15 大河内山荘前下車、小倉山入り口にて、小倉山を守る会の皆様と集合

8:15-8:40 小倉山の森の麓を歩く

小倉山の森や保津峡などの美しい自然の風景をお楽しみいただき、ランドスケープの観点からこの地の特性についてご案内いただきます。

案内人

増永滋生様(株式会社アドプランツコーポレーション 代表取締役)

8:40-9:40 小倉山景観保全地区の森の麓にて

「今、森で起きていること。小倉山の再生プロセスについて。」

小倉山山頂景観保全地区の森を知る

案内人

長尾憲佑様(小倉山を守る会会長、常寂光寺住職)

増永滋生様(株式会社アドプランツコーポレーション 代表取締役)

Tour Process 4

森という原点に還る

特別ゲストとして京都五山送り火連合会会長・NPO法人大文字保存会会長・長谷川英文さんをお迎えし、「森という原点に還る」ことをテーマに、京都の森を始め、日本全国の森を再生して来られたこと、また企業が森や自然に関わることの意義について、これまでの永年の経験を踏まえ詳しくお話をいただきます。さらに、和食文化の基本・お出汁を軸に食を愉しみいただき、お食事のあとには、うね乃株式会社代表取締役社長・采野元英様より、お話を伺います。滋賀1400年から続く森と水と共にある自社農園のお話、鯖街道とお出汁の物語、またお出汁の背景にある第一産業を持続するための自社の在り方についてお話を伺います。

11:00－12:00 二尊院にて

「どう在るか。森から、原点に還る。」

guest speaker: 長谷川英文様(京都五山送り火連合会会長・NPO法人大文字保存会会長)

12:00－13:30 昼食「お出汁の会」

案内人

采野元英様(うね乃株式会社代表取締役社長)

ツアー2日目は、コモンズ会議の1回目としても位置付けています。次の百年の社会を見据えた、新たな価値と物語をどのように、ここから生み出していくことができるのか？実際にそれぞれのステークホルダーのみなさまが集まって、京都の文化価値を持続することを意義として、価値の背景にある森と水といった自然資本を時代に合わせながら、進化させ持続することをどの様実現していくのかについて、多様な視点を重ね合わせながら、知恵を出し合う「コモンズ会議vol.1」を行いたいと考えております。

13:30－15:00

コモンズ京都会議 vol.1

案内人

小川 敦子(株式会社ロフトワーク Aru Society アートディレクター)

☐ introduction

- ・Aru Societyとは？プロジェクト全体のお話について。
- ・京都市都市戦略プロジェクトにて提唱した持続的都市構想「創造的都市、京都」とは。
- ・京都、大阪、東京という3つの都市を自然と文化でつなぐ、Aru Society。

☐ コモンズ京都会議：「自然と文化と都市の未来」

京都の文化価値を持続することを意義として、価値の背景にある森と水といった自然資本を時代に合わせながら進化させ、持続することをどの様実現していくのか。多様な視点を重ね合わせながら、知恵を出し合う。

15:00 ツアーvol.1 終了予定、解散

『夢を紡ぐ組織』

ロフトワークはありがたいことに、
日本を代表する企業や行政機関から未来に関する相談を受けることが多いです。
時には具体的な課題について、
また時にはクリエイティビティやイノベーションに関するものです。
(ちなみに、売上向上や競合対策、広告戦略の相談はあまり来ません笑)

そんな時、ふと思うことがあります。「この組織は、どんな生命体なんだろう？」
「法人」とはよく言ったものだと思います。
法の下に生まれる一つの人格。
その法人もまた、私たち自然と同じように、食べ物(資源)を求め、生きがいを感じ、考え、
時には波風を立てながらも、独自の性格や意志、美学を持っているのです。

では、魅力的な「人」とはどんな存在でしょう？
江戸時代、江戸や大阪、京都は世界有数の大都市でした。
平和と生産性の向上から生まれた豊かさが、日本独自の文化を育み、
それは海を越えて遠くヨーロッパにも届くほどでした。

それから300年、人類はさまざまな課題を乗り越えてきました。
かつて30%以上だった乳児死亡率は今や0.2%にまで減少し、飢饉も姿を消しました。
平均寿命は倍に伸び、1970年代に1.7万人を数えた交通事故死者数は1/7に減りました。
社会が抱える課題は徐々に少なくなっています。
そして、急速に賢くなりつつある人工知能は、
個々の個性や文化が織りなす組織を、もしかすると優秀ではあるけれども、
平坦でコモディティ化された存在へと変えてしまうかもしれません。
創業者や経営者が築いた文化、歴史、土地とのつながり、美学、そして未来へ向けた夢—。
魅力的な「人」が持つこれらの特質は、法人にも等しく必要です。
私たちはAruを通じて、日本の素晴らしい企業や団体が持つその魅力を再発見し、
社会に向けて発信していけたらと考えています。

御案内人のみなさまについて

株式会社アドプランツコーポレーション 代表取締役

増永 滋生 様

大学卒業後、出版社で環境分野の担当で勤務後、自然環境保全会社で調査計画に10年以上携わったのちに、2011年に株式会社アドプランツコーポレーションを設立。里地では人が育たなければ森が育たないという考えから、地域づくりを伴走支援する組織として、特定非営利活動法人ひととりデザイン研究所を2015年に設立。森が育つまで長い年月が掛かる中で、市民や企業等と様々な連携の手法を探りながら、株式会社、NPO法人の両車輪で、環境を守るための調査研究や地域づくり活動を行っている。近年では、自然再生の過程で発生した間伐材や副産物を活用した6次化商品を開発し、販売した収益を地域の自然再生活動の資金として活用するなど、循環的な活動展開を幅広く行っている。

冬夏株式会社 代表取締役

奥村 文絵 様

フードディレクター。日本の“食べる”をデザインする仕事の草分けとして2000年より活動開始。味や食文化をビジュアル化するフードディレクションファーム、Foodelco Inc.（フーデリコ株式会社）を2008年に設立。東京を拠点に、老舗の飲食企業や地域特産物のブランディングを多数手掛けるほか、21_21DESIGN SIGHT で開催された「テマヒマ展（東北の食と住）」と「コメ展」に企画協力。2015年、京都へ移転し、オーガニックの日本茶に特化したテールーム「冬夏」を開業。御所東エリアにある築100年の日本家屋をリノベーションし、国内外の美しい手仕事を紹介するギャラリー「日日」を併設する。2021年には冬夏株式会社を設立し、ボトルティー「冬夏青青 toka_scisci」の開発、製造、販売をスタート。文字通り「世界一小さな飲料メーカー」となり、日本茶に「最高級ノンアルコールビバレッジ」としての可能性を見出すとともに、日本文化の継承と改新をミッションとするカルチャープレナーとして、新たなビジネスモデルに挑戦している。著書に『地域の「おいしい」をつくるフードディレクションという仕事』（青幻舎）。

花人

杉謙太郎 様

福岡県生まれ。室町時代に始まった古典花道といわれる「いけばな」を軸に国内外問わず花会を開催。花会では特に様々な視点と角度から花の内面世界を詠みあげる。種子や花の液体、あるいは花の亡骸までも生けるという行いは、いけばなの範疇を破り、余情表現を追求する。土の作品制作をはじめとして、江之浦測候所、多摩美術大学、東京画廊、東大寺などで作品を発表。

宇沢国際学館 代表取締役

占部 まり様

内科医、宇沢国際学館取締役。1965年、シカゴにて宇沢弘文の長女として生まれる。東京慈恵医科大卒。現在は地域医療に従事するかたわら、宇沢の「社会的共通資本」をより多くの人に知ってもらうための活動を行う。2022年京都大学人と社会の未来研究院にて、社会的共通資本と未来寄附研究部門発起人。

京都大学 大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 社会疫学分野 主任教授

医師・博士(医学)近藤 尚己 様

専門分野:社会疫学・公衆衛生学

略歴:2000年山梨医科大学医学部医学科卒業。卒後医師臨床研修後、山梨医科大学助教・同講師・ハーバード大学フェロー、東京大学准教授などを経て現職。健康の社会的決定要因と健康格差に関する疫学研究を進めている。

近著:『実践 SDH診療 できることから始める健康の社会的決定要因への取り組み』中外医学社(共同編著)、『健康格差対策の進め方:効果をもたらす5つの視点』医学書院(単著)、『社会疫学<上・下>』大修館(監訳)、『認知症plus地域共生社会 つながり支え合うまちづくりのために私たちができること』日本看護協会出版会(共同編著)、『社会と健康:健康格差解消のための統合科学的アプローチ』東大出版会(共同編著)、Health in Japan: Social Epidemiology of Japan Since the 1964 Tokyo Olympics(Oxford), the Atlas of Health Inequality in Japan (Springer)など。

ウェブサイト:「京都大学大学院医学研究科 社会疫学分野」<https://socepi.med.kyoto-u.ac.jp/>

武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所所長・造形構想学部

クリエイティブイノベーション学科教授

若杉 浩一 様

武蔵野美術大学 造形構想学部 教授、ソーシャルクリエイティブ研究所 所長。1959年熊本県生まれ。九州大学芸術工学部卒業。プロダクト、インテリア、建築、サービスデザイン、商品企画をインハウスデザイナーとして活動する中で、自主的に地域社会のデザインの有り様を模索し、ソーシャルデザインを23年間実践して来た。数多くのまちづくりや、プロジェクトを実施し、自らが主催する団体(日本全国スギダラケ倶楽部)は、全国で27支部2400人の規模になり、沢山の多様な人々と連携しデザインの新しい活動を実践している。

サントリーパブリシティサービス株式会社
PRコミュニケーション事業部 企業PR部サステナビリティ連携主任
田中 省伍 様
<https://www.sps.sgn.ne.jp/>

常寂光寺 住職、小倉山を守る会会長
長尾 憲佑 様
<https://jojakko-ji.or.jp/>

小倉山二尊院 代表役員 住職、小倉山を守る会副会長
羽生田 実隆 様
<https://nisonin.jp/>

京都五山送り火連合会会長・NPO法人大文字保存会会長
長谷川 英文 様
* 本プロジェクト インタビュー記事「原点としての自然へ回帰する」
<https://aru.org/shizenhe/>

うね乃株式会社
代表取締役社長 采野元英 様
取締役副社長 采野佳子 様
<https://odashi.com/pages/about>

ツアー参加者のみなさま

末次 貴英 様(代表取締役社長 兼 CIOO(Chief Integrated Operations Officer:最高統合執行責任者))
<https://www.amita-hd.co.jp/>
徳本 誠 様(株式会社ジャクエツ取締役専務執行役員、所属部署:パブリックスペース)
<https://www.jakuets.co.jp/>
生田 裕史 様(株式会社船場 Ethical Design Lab.プランニングマネージャー)
<https://www.sembla1008.co.jp/ja/sustainability>
石坂 小鈴 様(石坂産業株式会社広報グループ)
<https://ishizaka-group.co.jp/>
武野 璃子 様(エイチ・ツー・オー リテイリング株式会社 経営企画室 サステナビリティ推進部CSR推進担当)
<https://www.h2o-retailing.co.jp/ja/index.html>
Rogier Uitenboogaart ロギール アウテンボーガルト様(かみこや代表、和紙アーティスト)
<https://rogier.jp/>
延原 令奈 様(VMG HOTEL & UNIQUE VENUES(パリューマネジメント株式会社)Party & MICE事業部)
<https://www.vmc.co.jp/>

運営・企画

株式会社ロフトワーク

諏訪 光洋（代表取締役社長）/AruSocietyプロジェクトリーダー

https://loftwork.com/jp/people/mitsuhiro_suwa

小川 敦子（アートディレクター）/AruSocietyアートディレクター

https://loftwork.com/jp/people/atsuko_ogawa

横山 暁子（京都ランチ共同事業責任者）/マーケティング

https://loftwork.com/jp/people/akiko_yokoyama

上ノ園 正人（京都ランチ共同事業責任者）

https://loftwork.com/jp/people/masato_uenosono

小島 和人（プロデューサー / FabCafe Osaka 準備室）

https://loftwork.com/jp/people/kazuto_kojima

浅見 和彦（プロデューサー）

https://loftwork.com/jp/event/20200903_robotwellbeing

<https://loftwork.com/jp/project/newview-school>

AruSociety共同企画・デザイナー

16 design Institute（図録デザイン研究室）代表

グラフィックデザイナー。1985年愛知県豊橋市生まれ。グラフィックデザインの領域から社会との関わりを考え、それを残すことを目的とし、人との縁を大切にしながら、少しでも後世に残すために活動。「清水寺」のブランディング事業や「山口ゆめ回廊博覧会2021」の映像制作。岡山県瀬戸内市牛窓町にて haruka nakamura、牧野伊三夫と共に牛窓中学校の第二の校歌となる「牛窓のうた」を2024年4月に発表。

ロフトワークについて

中堅規模以上の大手日本企業、経産省などの省庁、地方自治体、教育機関等クライアントパートナーから、主にイノベーション領域に関わる新規事業の仕組みのデザイン構築をアウトソーシングとして事業を受託し請負う「クリエイティブ事業」が、全体の売上構成の内、約8割を占めている。イノベーション領域における価値創造モデル開発、大規模型のウェブサイト構築によるデジタルコミュニケーション設計、新規領域における人材育成プログラムの開発、社内アワード等による企業内起業仕組み開発、ブランディング等、活動の範囲は多岐に渡るが、それらの活動の軸には、プロジェクトマネジメント（PMBOK）の知識体系を導入することで、誰もが複雑で多様なプロジェクトをデザイン、マネジメントしながら進行することのできる仕組みが構築されている。さらに、クリエイターとメーカーを繋ぐイノベーションプラットフォームを軸とし、事業開発支援を行う「MTRL事業」、空間・体験・コミュニティを企画運営する「レイアウト事業」、デジタルファブリケーションを軸とした「ファブカフェ事業」へと派生している。ファブカフェは、国内は渋谷、京都、飛騨、名古屋、富士吉田の5ヶ所、海外は台湾、メキシコなど9カ国に渡り現在展開を広げると、主軸事業から、さらに多様な事業が国境を超えて展開されている。